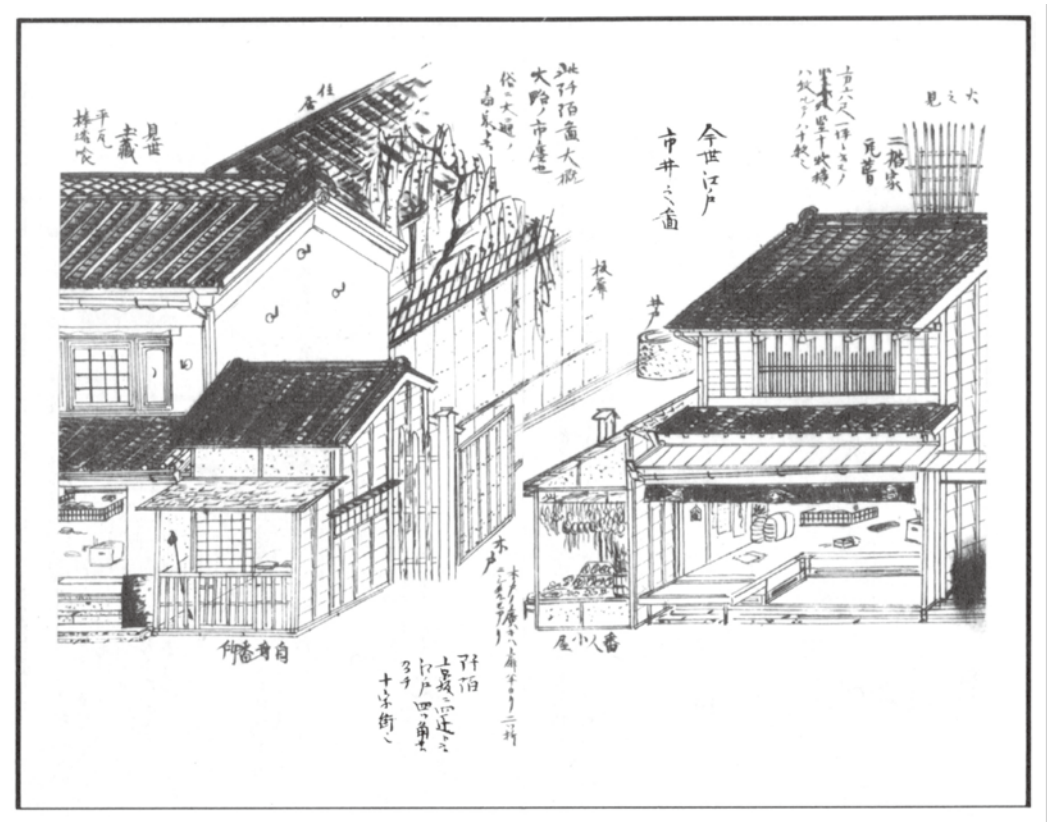
川越市立博物館

博物館だより

第 64 号



『守貞漫稿』　朝倉治彦編　東京堂出版より

『守貞謾稿』と川越

喜田川守貞が著した『守貞謾稿』は、江戸時代の風俗に関する考証的随筆です。明治 41 年（1908）に『類聚近世風俗志』として初めて翻刻され、その後昭和 48 ～ 49 年に『守貞漫稿』（全 3 巻）として影印本が刊行されました。影印本の題名を「守貞漫稿」としたのは、自筆稿本を所蔵する国立国会図書館の目録名に拠ったものと思われます。稿本では「漫稿」ではなく「謾稿」の字を使用しています。「謾」には「あざむく、いつわる」の意味があることから、名称の「守貞謾稿」には、意に反して完璧な草稿をまとめきれない著者の気持が反映しているとの指摘もあります。

著者の喜田川守貞は、文化 7 年（1810）大坂に生まれ、天保 11 年（1840）9 月、31 歳の時に江戸にくだり、北川家を継ぎます。「喜田川」は借字と考えられます。執筆の動機について守貞は、「黙して居諸を費さんことを患へ、一書を著さんと思ひ、筆を採りて几に対すれども、無学短才、云ふべき所なし。ここにおいて、専ら民間の雑事を録して子孫に遺す。」と述べています。内容は、約 700 項目にものぼる名辞や事象を分類し、説明を加えています。とりわけ特徴的なのは、説明に多くの挿絵を使用していることです。

上掲の「今世江戸市井之図」は『守貞謾稿』巻之三に収められているものです。ここで守貞は江戸の見世土蔵について説明しています。

明治 26 年（1893）の大火後に作られた川越の土蔵造り商家は、「東京の問屋の蔵造を手本とし、各店競争で職人を奪いあうようにし、中には東京から職人を呼んで、腕のよい職人の引張り合いで普請を始めた」（宮下辰夫著『川越の蔵造』）といわれており、『民家は生きてきた』の中で著者の伊藤ていじ氏は「実に川越の蔵造は、江戸の店蔵の最後の花である」と述べています。『守貞謾稿』は、江戸の店蔵と川越の蔵造りを比較検討するのに貴重な史料となるものです。

さて、江戸時代の風俗について最も重要な文献の一つである『守貞謾稿』は、一時期川越に留め置かれたことが、その序にあたる「概略」に記されています。「概略」が書かれたのは嘉永 6 年（1853）冬で、この年 6 月にはペリーが浦賀に来航し、江戸市中が騒然となった年です。守貞は「近時に夷船再航の状ありて、衆心石上に坐するがごとく」と述べ、「諸財とともに櫃に納めて、今日川越の親族に託す」と記しています。江戸市中の混乱を心配して、一時期原稿を川越の親類に預けたことになります。残念ながら、『守貞謾稿』を預けた川越の親類についてはわかっておりません。これには追書があり、「墨夷来りて恐らくは戦争のことあらんと思ひしに、幕府無事を旨とするにより、その難なし。故に即時、川肥〔越〕よりこれを復して、追書・追考」を行い、最終的には慶応 3 年（1867）に筆を擱いたようです。

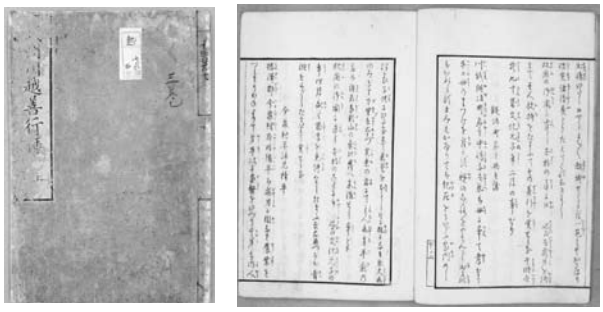
（本文中の『守貞謾稿』の引用は、岩波文庫『近世風俗志（守貞謾稿）』によりました。）

江戸時代の「善行」―『武州川越善行録』にみる城下町の人々とくらし―

はじめに

「善行」とは「善い行い。道徳にかなった行い」と広辞苑にあります。具体的にいえば、親への孝行や主人へ忠義をもって仕えることです。今回紹介する『武州川越善行録』[*1]（以下『善行録』と記す）を素材にして、どのような善行が行われていたのか、ひいては江戸時代とはどのような時代であったかを見ていきましょう。

この『善行録』は、おそくとも文政３年（1820）６月以降に、川越藩領内に住む町人・百姓など 33 件の善行が記されたものであります。川越藩士などの武士が含まれていないため、身分制社会である江戸時代ならではという印象をうけます。



『善行録』の表紙（上巻）と本文（下巻第２丁）（館蔵）

現在の北海道にあたる蝦夷地探検で著名な最上徳内が文政２年（1819）８月に、『善行録』に対して序文を提供しています。これから、『善行録』の著者である「今也川越邑」（今成村）に住む当時 79 歳の栗原満啓は、その息子茂八に請われる形でこの本をまとめたことがわかります。なぜ最上徳内が序文を記したのか、その理由については不明ですが、当時幕府の山林御用の関係で八王子にいた徳内とこの茂八の間に何らかの関係があったのかもしれません[*2]。

続く跋文では川越藩の国学者である「楽水堂道意」こと沼田順義が、文政３年６月付けのものを載せています。跋文とはいわゆるあとがきのことなので、文政２年の秋から冬にかけて満啓は原稿を調え、ついに翌３年に出版に至ったことがうかがえます。

この『善行録』は、木版で出版されたものです。下巻末尾に「江戸書林」として「須原屋文助」の他に４人の版元が記され、江戸を中心としてこの『善行録』が出版されたと考えられます。現在博物館では全３巻を所蔵しておりますが、この他にも埼玉県立浦和図書館・埼玉県立文書館（熊谷市・野中家寄託文書）など県内は勿論のこと、国立公文書館には昌平黌（幕府の学問所）旧蔵本も確認できます。

この『善行録』が出版される少し前、江戸幕府では老中松平定信による寛政の改革の一環として、寛政元年（1789）に各地で表彰された善行者を全て報告するよう命じました。これを集大成したものが享和元年（1801）に成立した『官刻孝義録』全50巻です[*3]。このように善行が賞賛の対象となっていく全国的な動向のなかで、ここ川越でも『善行録』が作られたようすがうかがえます[*4]。

また『善行録』には多くの挿絵があり、目でみえる形で善行の様子を示しているのが特徴の一つです。挿絵は全部で 30 葉あり、うち 27 葉は「雪江」のものであることが下巻末尾の挿絵に記されています。彼の作品は他に文政 11 年（1828）氷川神社所蔵の絵馬「韓信股くぐり図」や「五月幟」（５頁に掲載）があり、江戸時代後期に川越地方で活躍した絵師と考えられます。

それでは具体的に『善行録』であげられた善行者を紹介していきましょう。

１『善行録』にみる町人のくらし

先述のように、この『善行録』では 33 件が紹介され、寛延４年（1751）から文政元年（1818）まで、ほぼ年代順に紹介をしているのが特徴です。『善行録』の大部分は、いわゆる松平大和守家が川越藩 15 万石を治めていた時代＜明和４年（1767）以降＞で、その藩領は広範にわたり、県内はもとより現在の千葉県にも領知がありました。そのため、現在の川越市内にとどまらず多くの地域の善行者が『善行録』で取り上げられています（表参照）。ここでは川越の城下町に限定し、（1）町人（2）奉公人の２種類にわけ、善行から当時の人々のくらしぶりを見ていきましょう。

江戸時代の川越城下は 10 の町と４つの門前町からなり、幕末の慶応３年（1867）、人口は 4,486 人で家数は 842 軒ありました。そのうち商人は 600 人、職人は 167 人であったことが「武州入間郡川越町諸色明細帳」[*5]からわかります。

川越城下の町割り図（「川越御城下絵図面」をもとに作成）

当館展示図録『町割から都市計画へ』より

雷を恐れる母に付き添う半右衛門の図

①南町近江屋半右衛門（表・４番）

南町は現在の元町・幸町の一部で、「札（ふだ）の辻」（幕府などが出した法令を記した高札（こうさつ）を掲げた場所の交差点）の南側にあたることが地名の由来です。

この半右衛門家は呉服を商う裕福な町人でありました。半右衛門が家督を継ぐ前に長松と呼ばれていたころは、父母が外から帰ってくれば、さぞ疲れたのではないかと言って腰や膝を揉んだり、暇があれば店へ出て商売の手伝いをするほどでした。やがて成長した長松は半右衛門の名を引き継ぎ、父が名を替えて隠居したあとも、北町の水村家から迎えた妻とともに父母へ孝行を続けました。

例えば、雷を恐れて押し入れや戸棚に隠れてしまう母に対して、店の若者４，５人とともに半右衛門夫婦が駆けつけてなぐさめたり、召し使いの下女に笑われながらも、半右衛門は父のところへ赴き興味深い話をしてそのまま一緒に寝るなどの孝行を尽くしました。それは著者の栗原満啓より、「世に孝子あまたありといへども、此（この）人の右に立らん人は未聞もおよばず」と、いまだかつて見たことのない孝行ぶりと評されるほどでありました。

表 『武州川越善行録』の構成

巻	番号	年代	対象
上	1	寛延4年（1751）	多賀町桶屋伊右衛門弟子長八
	2	宝暦2年（1752）	川越城下町続寺井宿百姓喜左衛門悴惣兵衛
	3	宝暦2年（1752）	南町油屋庄右衛門召仕七兵衛
	4	宝暦2年（1752）	南町呉服商近江屋半右衛門
中	5	宝暦2年（1752）	江戸町座頭仲都
	6	寛延2年（1749）	比企郡八林村百姓十助
	7	寛政元年（1789）	上松郷町酢屋市郎兵衛下男新六
	8	年未詳	高麗郡鯨井村有泉の幾右衛門
	9		小浜村曽右衛門妻
	10	寛政5年（1793）	入間郡堀兼村仁右衛門養女はな
	11	寛政6年（1794）	入間郡中台村百姓与七
	12	寛政11年（1799）	入間郡古谷本郷名主権太
	13	寛政11年（1799）	入間郡古谷本郷百姓彦右衛門
	14	享和元年（1801）	埼玉郡本川俣村名主堀越七郎治
	15	享和元年（1801）	入間郡鴨田村百姓武右衛門
	16	享和元年（1801）	入間郡大久保村孫左衛門甥仁助
	17	享和3年（1803）	下松郷分六軒町百姓吉兵衛姉きよ
下	18	文化元年（1804）	埼玉郡裏慈恩寺村百姓千蔵祖父兵蔵
	19	文化元年（1804）	鍛冶町名主中嶋与兵衛
	20	文化元年（1804）	榛沢郡今泉村百姓平治兄権平
	21	文化元年（1804）	入間郡大袋新田百姓庄左衛門
	22	文化年間か？	埼玉郡下岩瀬村百姓勝右衛門・妻
	23	文化2年（1805）	那賀郡猪俣村百姓源右衛門
	24	文化2年（1805）	那賀郡広木村大興寺住職丘峯
	25	文化3年（1806）	入間郡藤間村百姓孫四郎悴宇之助
	26	文化3年（1806）	埼玉郡上川俣村百姓庄兵衛
	27	文化3年（1806）	埼玉郡下須戸村組頭弥五兵衛
	28	文化3年（1806）	埼玉郡下岩瀬村組頭宗六
	29	文化7年（1810）	埼玉郡中曽根村百姓清左衛門母きよ
	30	文化10年（1813）	大里郡相上村百姓安左衛門
	31	文化8年（1811）	上総国望陀郡笹村百姓勘左衛門
	32	文政元年（1818）	入間郡牛子村百姓藤兵衛長子林蔵
	33	文政元年（1818）	妙養寺門前石工金五郎同居富五郎

註：資料番号1999-K02-0001

また、半右衛門家の裏店に住むある夫婦に男の子が生まれましたが、その妻は出産で亡くなってしまい、貧しさのためその子も母の棺に入れるしかないとの話を聞いた半右衛門は、その子をもらいうけ、後には養子に出すなど、親以外の者への愛情も人並みはずれていました。そのような振る舞いが川越藩へ報告され、宝暦２年（1752）綿２抱を下賜されその孝徳が賞賛されました。

②鍛冶町名主与兵衛（表・19 番）

鍛冶町は現在の幸町の一部で、法善寺があるあたりの場所です。天文・弘治年間（1532 ～ 58）に相模国（現在の神奈川県）から鍛冶の平井某やその門人たちが移り住んだことが地名の由来であるとして、江戸時代後期の幕府の地誌である『新編武蔵風土記稿』*6 に記されています。

この鍛冶町の名主であった与兵衛は、普段より両親の申し付けをよく守り、それだけでなく家内の召仕まで慈愛をもって接していました。そのため、与兵衛が病気を患ったときには、その下男兵右衛門は讃岐国象頭山（現在の香川県金刀比羅宮）へ参詣し、病気の回復を願うほどでありました。この与兵衛の常日頃からの態度が川越藩から顕彰されて、文化元年（1804）に永く苗字を名乗ることが認められました。

この名主与兵衛は、享和元年（1801）に川越の地誌で有名な『武蔵三芳野名勝図会』を著した中島孝昌のことです。彼は海保青陵や伊藤恒庵に学び、多くの江戸在住の文人たちと交流をもっており、俳句や狂歌でもその才能ぶりを示した川越城下における文化人の一人でもありました。町名主として単に知識だけでなくこのような徳を備え持つことも、その資質として重要であったことがうかがえるエピソードです。

中島孝昌画像　（中島千代子氏蔵）

２『善行録』にみる奉公人のくらし

①多賀町桶屋伊右衛門弟子長八 (表・１番)

多賀町は現在の時の鐘付近の町名です。もともと桶作りを生業とする者が多く、そのため箍町と称されていたのが、後に多賀町と書き換えられたと、『新編武蔵風土記稿』に記されています。

桶職人伊右衛門のところに、吉田村（市内吉田）出身の長八が弟子入りしたのは 12,3 歳の頃でした。やがて師匠の伊右衛門は病気になり、桶細工も長八一人でやりくりするようになりました。もともと酒ぐせの悪い伊右衛門は、次第に桶作りもやめ毎日酒を飲む始末で、ついには父藤兵衛から勘当をうけ、町から出て行かざるを得ない状況になりました。しかし長八は、師匠の恩を受けた我が身なので、どこまでもお供したいとして一緒に川越を出て行きました。

酒を買い求める長八の図

長八は煙草をのむほかは、着ている服を替えもせず、桶細工の収入があったときには、伊右衛門の好む酒を買うなど、年月を重ねても、長八の伊右衛門に仕える忠義の心は金のごとく不変でありました。

その後、長八の父である吉田村百姓権右衛門が亡くなると、跡を継いで百姓になるよう長八は言われました。しかし、誰かがいなければ伊右衛門は人にも疎まれ、長八はその後が心配でなりませんでした。結局長八は、朝早く起き日が暮れるまで吉田村で耕作を営み、夜は桶細工にいそしみ、このお金を蓄え、毎月伊右衛門へ送金することで、伊右衛門への報恩を示す道を選びました。そしてついに寛延４年（1751）６月16日、幕府から米が下賜され、その忠誠が賞賛されました。

②上松郷町酢屋市郎兵衛下男新六 (表・７番)

上松郷町は現在の松江町２丁目のことで、もとは松郷の一部であったのが分離して町になりました。「郷」と「江」はくずし字で書くと非常に似ているため、「た

またま松江と誤り記し」と、誤記され「松江」になったことが、『新編武蔵風土記稿』に記されています。

新六は武蔵国樋遣川（ひやりかわ）村（現在の加須市）出身。14歳のときに酢屋市郎兵衛のところへ10年の契約で奉公に来ました。酢の杜氏（とじ）としての新六の働きは、主人市郎兵衛から家を大きくしたと言われるほどでした。

子を抱え行商する新六の図

ところが宝暦８年（1758）９月３日多賀町からの火事で市郎兵衛家は類焼し、また主人市郎兵衛の妻も５人の子を残して亡くなるなどの不幸が続きました。新六は、子どもの世話で酢造りもままならず、その面倒をみながら主人の持つ田畑を耕すような生活を送りました。

このような実直な新六を世間が黙ってみているはずがありません。多額の給金で酢杜氏として迎えたい、婿養子に欲しいと、引く手あまたでしたが、新六は主人の家業を心配に思い、その申し出を断り続けました。

しかし安永３年（1774）12月14日は鴫町で、２年後の安永５年の冬には近所と立て続けの火事で、市郎兵衛の跡を継いだその長子市郎右衛門は生活が成り立たず、見兼ねた新六は自分が借りていた借家に市郎右衛門とその妻子を迎え、新六は市郎右衛門の子どもを抱え行商し、主人のために力を尽くしました。

そして、寛政元年（1789）14歳から62歳まで48年間、身命をなげうち主人に仕えたことから、川越藩より金銭を下付され褒賞されました。この後新六は寛政７年（1795）69歳で亡くなりましたが、主人の菩提寺である小久保村本應寺（市内石原町）に葬られ、今も新六の事蹟を忍びお参りするものが時々いると、著者の満啓は記しています。

おわりに

わずか４名の紹介ではありますが、江戸時代の善行や、川越町人のくらしの一端を垣間見てきました。

ここで示されている善行は、例えば酒乱の師匠に従った桶職人の長八など、どちらかというとわがままな主人や両親に対して、ひたすらに献身的な孝行を続けたことが美徳として褒賞されています。それは儒教的な考えが一般的であった江戸時代のあり方が色濃く反映された結果であると考えられます。

五月幟　（館蔵）

しかし、町内の火事などの打ち続く不幸にめげずに主人へ奉公を続けた新六や、殺されかけた子どもを救った半右衛門など、現代社会においても美徳に通じるものもあります。このような先人たちの善行の歴史を、80歳になろうとする著者の栗原満啓が遺したことを、さらに検証していく必要性を感じました。

（学芸担当　宮原一郎）

○参考文献

*1 山田泰男氏「川越町人の手に成る『武州川越善行録』について」（『埼玉史談』48-4、平成14年）

*2『最上徳内』（吉川弘文館、昭和52年）

*3『孝義録』の分析については、総論として菅野則子氏『江戸時代の孝行者』（吉川弘文館、平成11年）や、介護の側面から柳谷慶子氏『近世の女性相続と介護』（吉川弘文館、平成19年）などの研究がある。

*4 同様なものとして、仙台藩では嘉永３年（1850）に『仙台孝義録』が作られている（柳谷氏前掲著作参照）。

*5 埼玉県立文書館所蔵、埼玉県行政文書（M19-1）。

*6 幕府編さんの武蔵国の地誌。文化・文政期（1804～30）ころの武蔵国内の村や町について、地名の由来や地形や広さ、軒数や誰が村を治めていたかなどを編集してまとめたもの。

埼玉県立特別支援学校塙保己一学園と博物館との連携 ①
（県立盲学校）― 実物に触って学ぶ ―

きっかけ

「触れないなら、教室の窓ガラスを触っているのと同じだ！」博物館に見学に行った生徒の口から出た感想です。それを聞いた先生が､何とか社会科の授業で、実物に触って体験させ、児童生徒の理解を深め、広げるような授業ができないかと考えました。時を同じくして川越市立博物館でも、ユニバーサルデザインを検討する動きがあり、博物館と学校双方のよりよい連携の在り方を模索していく活動が始まりました。

出前授業（移動博物館）

学校と博物館との地理的距離があったため、まずは博物館職員が学校に出向き、社会科の授業を行う「出前授業」に取組みました。この授業を行うことで、生徒達の興味関心を高めることはもちろん、実体験に基づいた理解を深めさせることができました。また、教員の願いとして、県内各地域から通学している児童生徒達に、自分の通っている学校がある地域や、その地域の歴史を知ってもらいたいという思いもありました。以下に、6 年間に行った「出前授業」の内容を紹介します。

平成 17 年度	「昔の生活を知ろう」 ・釜、箱膳、お櫃（ひつ）等の説明と触擦 ・洗濯板での洗濯、火のし体験
平成 18 年度	「縄文時代を知ろう」 ・縄文土器（本物）の説明と触擦 ・黒曜石の鏃（やじり）で紙切り、火おこし ・縄文の文様づくりの体験
平成 19 年度	「武士の時代を知ろう」 ・刀、弓矢の説明と触擦 ・山駕籠に乗る、担ぐ、鎧兜を試着する体験
平成 20 年度	「古墳時代を知ろう」 ・古墳の模型、埴輪、土器（本物）の説明と触擦 ・勾玉作りの体験
平成 21 年度	「昔の道具を使ってみよう」 ・火のし、炭火アイロン、洗濯板での洗濯体験 ・石臼で、きな粉作りの体験
平成 22 年度	「昔のはかりを使ってみよう」 ・升、台秤、棹秤で量る体験

※触擦：物の全体と部分を触って理解すること。

出前授業に参加するのは、小学部から高等部に属する盲学校の児童生徒達です。1 時間の授業の中で取組み、交代制で行います。

子ども達は、毎年「出前授業」を楽しみにしていると聞きます。それは、普段教室では体験できないことができることと、体験の一つ一つが授業とつながり、理解や知識がより深まるからです。

具体的な実践事例の紹介

平成 22 年度は、「昔のくらしを考えよう」という課題で、『はかり』の体験を通した授業を行いました。

○準備した博物館資料

・升（一合、二合、五合、一升、五升、一斗）
・台秤　　・棹秤（大、中、小）
・俵（もみ殻を入れたもの）

○授業の進め方

45 分間の中で、①升 ②棹秤 ③台秤の順にそれぞれ体験を行います。

○棹秤を例に

俵を持ち重さを実感します。棹秤の仕組みを知った上で、実際に俵を量ります。

棹秤で俵を量っている様子

○生徒の感想

「俵がどんなものか、触ってみて分かった。本当は、これに米が入っているので、もっと重いと思うし、持ち上げられないと思った。」

まとめ

「博学連携」で大切なことの一つに、『継続して取組むこと』があげられます。盲学校との連携は、7 年目に入り、打合せを重ねる毎に両者の理解も深まり、授業のねらいに迫る充実した体験活動が行われてきています。今後も、児童生徒にとって感動や発見の持てる授業づくりを両者で行っていきたいと考えます。

（教育普及担当　大野晴代）

Information

平成23年度の博物館行事です。（3月まで）

講　座・教　室　etc.

●…一般向け事業　○…子ども向け事業
開催日　講座名　「内容」　申込み開始日

1月

14(土)～　第22回　むかしの勉強・むかしの遊び展

●8(日)　野外博物館教室
「川越の祭りを巡る―南大塚の餅つき踊り―」　12/3

●15・22・29(日)　博物館歴史講座
「川とくらし」　1/7

○14(土)　子ども体験教室
「まゆ玉飾りを作ろう」　1/5

○21(土)　子ども体験教室
「土笛・土鈴作り」　1/6

●28(土)　土偶作り教室　1/9

2月

第22回　むかしの勉強・むかしの遊び展

●12・19・26(日)　博物館歴史講座
「博物館展示資料を語る」　2/1

○4(土)　子ども体験教室
「昔の道具を使ってみよう」　申込不要

○18(土)　子ども体験教室
「昔の道具を使ってみよう」　申込不要

○25(土)　子ども博物館教室
「昔の織物に挑戦」　2/2

3月

～4(日)　第22回　むかしの勉強・むかしの遊び展

24(土)～　第37回企画展
『建築家保岡勝也の軌跡と川越』

○10(土)　子ども体験教室
「和紙作りに挑戦」　3/1

○17(土)　子ども体験教室
「からくり人形のしくみを知ろう」　3/2

※変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。お問い合わせは博物館まで。

子ども体験教室は、午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分の時間帯で行います。

ご　紹　介

＜博物館受付でお求めいただけます＞

開館20周年記念特別展　知恵伊豆　信綱
―松平信綱と川越藩政―
A4判　一〇四頁　九〇〇円

今日の川越の発展に深くかかわったとされる松平信綱に焦点をあて、改めてその事績を紹介しています。

川越城本丸御殿竣工記念　第35回企画展
川越城―描かれた城絵図の世界―
A4判　八二頁　七〇〇円

川越城の城絵図などからその歴史的変遷を紹介しています。

DVD

川越城本丸御殿保存修理工事　45分

平成20年から2年半かけて行われた川越城本丸御殿保存修理工事の様子を記録したものです。

第 22 回 むかしの勉強・むかしの遊び展

平成２４年１月１４日（土）～３月４日（日）

今年我が国は、地震や台風などにより未曾有の大災害に見舞われました。多くの方が被災され、厳しい生活を余儀なくされました。そんな中、今では懐かしくなった様々な道具が活躍しました。洗濯機が使えなくなった地域では「洗濯板」が、携帯電話やテレビが使えなくなった地域では「ラジオ」が用いられ、多くの人々の生活を支えました。

そこで今回は、約 100 年前に開始された「ラジオ放送」に着目し、様々な受信機を展示します。テレビ放送が開始される前、生活の主役であったラジオの歴史について、機器の変遷を中心に紹介します 。

真空管ラジオ（昭和 18 年頃）

利　用　の　御　案　内

◆入 館 料

区　分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館（観覧）券			
				•博物館 •美術館	•博物館 •本丸御殿 •蔵造り資料館	•博物館 •本丸御殿 •蔵造り資料館 •美術館	•博物館 •本丸御殿 •蔵造り資料館 •美術館 •まつり会館
一　般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※（　）内料金は、団体〔20 名以上、1 名につき〕の場合

◆開館時間　午前9時から午後5時まで（ただし入館は午後4時30分まで）

◆休 館 日　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）
第 4 金曜日（休日を除く）年末年始（12月28日～1 月 4 日）
館内消毒（6 月下旬）特別整理期間（12月下旬）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
（館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は 1 月 2 日から開館）

交　通　案　内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
　または西武新宿線　本川越駅より
・東武バスにて 「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩８分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩０分
・イーグルバスにて 「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩０分
※ 御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

ガ イ ド

・博物館
平日（開館日）午前 11 時・午後 2 時
土・日・祝日　午前 11 時・午後 1 時・午後 2 時・午後 3 時
※ 予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

・蔵造り資料館
毎月第 2 日曜日　午前 11 時・午後 2 時
※ 事前のお申込みはいりません。当日直接おこしください。

・川越城本丸御殿
毎月第 3 日曜日　午前 11 時・午後 2 時
※ 事前のお申込みはいりません。当日直接おこしください。

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のＱＲコードから登録の手続きができます。
随時、最新情報を配信します。
※ 登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。

機織り実演・体験（協力：博物館同好会）

・博物館
毎週火・水曜日　午後 1 時～ 3 時　華の会（裂き織り）
毎週木・土・日曜日　午前 10 時～ 12 時・午後 1 時～ 3 時　川越唐桟手織りの会
※ 予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

発行日　平成 23 年 12 月 28 日　　発行　川越市立博物館

〒 350-0053　川越市郭町 2 丁目 30 番地 1　　TEL049-222-5399　FAX049-222-5396
Ｅメール　hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
ホームページ　http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/